

対人関係の形成期における二者間の相互の呼び方の有無が対人行動の親密化に及ぼす影響

○小林加奈¹・西村太志²

(¹広島国際大学大学院心理科学研究科・²広島国際大学心理学部)

問題・目的

大学新入生は、どのように新しい関係の構築をしていくのだろうか。ある友人関係の親密化過程を縦断的に検討していく際に、各個人がそれぞれ形成する二者関係、ひいては集団内のすべての成員との関係に関するデータを収集し検討する必要がある(山中, 1998)。また三島(2003)は、小学生を対象にした研究で、呼ばれ方と相互の関係には関連があることを示している。では、大学新入生において呼び方や呼ばれ方は、対人関係の構築にどのような影響を及ぼすのだろうか。多くの大学では入学後すぐにオリエンテーションがあり、相互交流の機会がある。そこで、相互の呼び方の有無が対人行動の親密化にどのような影響を与えるかについて検討することを本研究の目的とする。具体的には、オリエンテーション直後の4月半ばと、学期末の7月末に調査を実施し、それぞれの時期の呼び方の有無と親密な対人行動の頻度の関連性を検討する。

方法

調査対象：H大学1年生P学科のうち、毎週1回ゼミ形式の演習を行い、相互の関わりのある2グループを対象とした。Aグループ14名(男性9名、女性5名)、Bグループ14名(男性9名、女性5名)、合計28名。**調査形式**：グループ単位の集合調査を実施。**調査内容**：第1回目：独自に作成した、呼び方についての質問項目(何と呼んでいるか等)や、親密行動を測定する質問項目(どのくらい会話をしたか、電話やメールをしたか等)計8問に、グループ内の全員に対して回答を求めた。第2回目：第1回目で使用した質問紙を7月用に変更した7問を用いた。**手続き**：第1回目、第2回目ともに、調査対象者の入室後、質問紙の内容について説明した後、質問紙に回答を求めた。第2回目で男性2名が欠席したため、分析にはAグループ13名、Bグループ13名の計26名分のデータを使用した。

結果・考察

本研究では相互の呼び方の有無と親密度の関連を検討するため、清水(2014)に即して、HLMでAPIMモデルのActor効果とPartner効果の交互作用効果を検討した。分析には清水(2016)のHAD Ver.15を使用した。4月時点での親密度を従属変数とした場合、モデルは有意であり

($Adj R^2=.419$, $F(3.154)=21.12$, $p<.001$), 呼び方の主効果($B=2.56$, $p<.001$), 呼ばれ方の主効果($B=2.47$, $p<.001$), 呼び方と呼ばれ方の交互作用($B=4.89$, $p<.001$)いずれも有意であった。交互作用について単純主効果の検定を行ったものを図1に示した。

4月の時点では呼び方が相互にある場合、親密度をより高くみなしていることが示された。

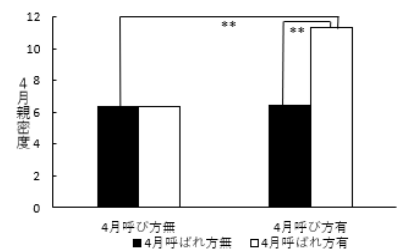


図1 4月の相互の呼び方の有無が4月の親密度に与える影響

また、4月の相互の呼び方の有無が7月の親密度に与える影響も同様に有意であり、

($Adj R^2=.162$, $F(3.154)=10.63$, $p<.001$), 呼び方の主効果($B=1.643$, $p<.001$), 呼ばれ方の主効果($B=1.783$, $p<.001$)いずれも有意であった。呼び方と呼ばれ方の交互作用効果は有意傾向であった

($B=1.715$, $p<.08$)。交互作用について単純主効果の検定を行ったものを図2に示した。

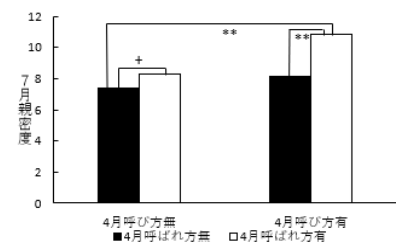


図2 4月の相互の呼び方の有無が7月の親密度に与える影響

4月の時点で相互に呼び方がある場合、7月の時点でも親密度が高くみなしていた。

これらの結果から、呼び方があり呼ばれ方もあることが、その人物との親密度を高めており、そのようにして形成された友人関係はその後継続されやすいということが考えられる。